

それは、僕が静岡の道場に通っていた頃のことです。皆、厳しい練習をしている中で、いつも先生に叱られて泣いている女の子がいました。Sさんです。Sさんは左手がない片手剣士でした。練習がつらいと途中でやめてしまい、いつも道場の隅で泣いているのです。

僕だって、片手だけで竹刀を振り続けるのはつらいので「仕方がないよな。」とどこかで他人事のように思っていました。すると決まって、

「まだまだやれるよ！休まない！」

と怒鳴り声がしました。館長先生です。

館長先生は皆よりいつも早く来ていて、Sさんの身支度を手伝っていました。

「今日も頑張るんだよ。Sなら出来るからね。」といいながら必ず最後の右手の籠手をつけてあげていました。

そんなある日の事、ある大会のメンバーの発表がありました。僕のチームにSさんが入っているのです。試合で勝ちたかった僕は正直言ってがっかりしました。一方で初めて試合に出ることになったSさんはあまり泣かなくなり、前よりも一生懸命頑張っていました。その姿を横目に僕はもくもくと練習していました。

この時の僕はSさんのことを少しも考えず、自分のことばかりを優先させていたのです。

大会の日がやって来ました。Sさんのデビュー戦です。「さあ、試合だ！」とチームの気持ちが高まっているときにSさんの姿が突然見られなくなってしまいました。試合に出たくないと、トイレに閉じこもってしまったのです。約三十分後、館長先生の必死の説得でトイレから出てきましたが、泣いてばかりです。普段あまり話したことのない僕達も

「一緒に頑張ろうよ。」

と励ましました。Sさんはようやく落ち着き、試合に出ることを決めてくれました。

先鋒、次鋒と試合は進み、ついに中堅のSさんの番が来ました。この大会は普通の試合ではなく、基本の出来を競うものです。

Sさんは大きな声で一生懸命片手で竹刀を振りました。先生方もチームの皆も夢中で応援しました。

「判定ッ。」

という主審の声に赤い旗が二本、白い旗が一本挙がりました。Sさんの勝利です。後の二人も勝ち星を挙げ、チームは快勝。まだ初戦だというのに皆が喜び、皆が泣きました。もちろん、一番喜んで、一番泣いたのは館長先生でした。

「人権」について、辞書で調べてみると「一般の国民に与えられる権利」と書いてあります。正直言って難しくよく分かりません。でも真っ先にこの試合のことを思い出しました。

僕達にとっては、道着を着たり、防具を自分でつけたりすることは当たり前のことで簡単に出来ることです。

しかし、健常者であれば、簡単で当然なことが、障害を持つ人にとっては、とても難しいことで、無理なこともあります。

そして、試合に出れば、誰だって、勝つ喜び、頑張った充実感、負けたときの悔しさを味わえるのです。これは、一つの「権利」かもしれません。

僕は、これらのことになにも疑問を持ちませんでした。

僕の体が周りの人と違っていたら、あの試合会場の開始線に立つ勇気があったのだろうか、大きな声を出して戦う勇気があったのだろうか。

館長先生は僕達みんなに教えたかったのだと思います。

Sさんには「勝つ喜び、負ける悔しさ」、「頑張ったら何でも出来ること、仲間が応援してくれること」。

そして僕達には、「何でも当たり前ではないこと」、「仲間を思いやる心」。

僕は相手を思いやるのが苦手です。転校を重ねてきているせいか、話しかけることさえも苦手です。

でも、これからは、相手のことを自分のことのように大切に考えて行動できるような勇気を持っていきたいと思います。